

個別最適な学びと協働的な学びの実現

今号は、個別最適な学びと協働的な学びをどう実現していくか、インタビューや実践例をとおして考えていきます。

提言

個別最適化とは、子どもの身体的・生活的な問題によって生じる学びの障壁が取り除かれた学習環境において、個々の子どもの興味関心や傾向特性に応じた学びを実現することである。識字障害や弱視など、身体的に文章を読むことが難しい子どもに対し、学習者用デジタル教科書を用いて書体やルビなどを調整することなどがその一例である。

個々の興味関心や傾向特性など、資質・能力の育成にかかわる個別最適化については、一斉授業の見直しが求められる。まずは子ども自身が自分に合った学びを選択することのできる環境を提供することが肝要である。リアルな環境設定の中で、子どもが自ら見いだした課題を自分に適した学び方で探究する学習活動などが、その一例として挙げられる。

協働的な学びとは、教師と級友はもとより、学校職員、保護者、地域住民など、多様な経験と価値観をもつ他者とかかわる中で、個々の資質・

能力が育成される学びである。この学びは、互いの持ち味を生かし、寛容な心と誠実な態度で他者を受け入れ、互いを信頼して進める姿をとる。この学びの実現にとって、目的の同一性と役割の個別性とを明確にすることは何よりも大切である。たとえるなら、脚本・配役・舞台設定など、異なる仕事をそれぞれが選択的に遂行することによって作品の完成を目指す、劇の創作活動のような学びである。

個別最適な学びと協働的な学びは、らせん的なつながりをもって子どもの健やかな成長に寄与する。その目ざす姿のある学校の校訓から引用すれば、次の一文に集約されよう。
「ともに学び 一人となる」



藤森裕治 ふじもり・ゆうじ

長野県生まれ。文教大学教授。専門は、国語科教育学、幼児教育学、日本民俗学。著書に『学力観を問い直す 国語科の資質・能力と見方・考え方』『授業づくりの知恵60』(明治図書)、『につぼんの図鑑』(監修・小学館)など。光村図書小学校・中学校『国語』教科書編集委員。